

冬山造林事業・無災害10年目を迎えて

久々野営林署黒川担当区 黒田安夫

1. はじめに

久々野営林署で冬山造林事業を始めたのが昭和49年、その年は、過去無災害が2年連続することのなかった造林事業で、まず5年間の無災害を目指し、全署をあげての取組みを始めた年でもあった。その後、夏山よりも数段厳しい条件下の冬山にもかかわらず1件の災害も起きず10年目を迎えたことは、我々にとって無上の喜びである。

しかし、その後夏山の造林事業では、軽傷とはいえ2件の災害が発生し、又昭和58年1月20日には私達の製品の仲間が重大災害に遭うという最悪の事態となった。我々が無災害でも、身近には災害発生の可能性がいくらでもあるということを再び見せつけられたものである。今年度は2度と重大災害は出さないという決意の下に、全署をあげての安全活動を行ってきたが、他署とはいえ、造林事業でも重大災害が発生したこともあって、現在は一同、より一層気を引き締めて、より積極的な安全活動に取り組んでいる。ここで、この10年間の成果を発表し、批評を仰ぎ今後の糧としたい。

2. 安全活動の内容

冬山造林事業は、昭和57年度までは黒川担当区部内のみで除伐・枝打を行ってきたが、今年度から、久々野・秋神担当区部内での除伐も行っている。

私は昭和54年度の業務研究発表会で冒頭に述べた昭和49年度からの造林事業での5年間の無災害を目指した取組みと、それを達成した成果について発表した。その内容は、先ず当署の昭和49年以前の災害事例の分析から、足場に起因するものや、基本動作の欠如によるものがほとんどであったため、

- (1) 足場の確保・確認
- (2) 基本動作の徹底
- (3) よりよいチームワークづくり
- (4) 相互注意の励行

以上、4点を柱として全員初心にかえっての取組みで無災害を達成したというものであった。我々はやれば出来るという自信を持った。そして、この自信が今日につながっているものと確信して

いる。

このように災害を防ぐには、過去の災害事例の分析から我々のまわりの不安全因子に対して対策を講じるのだが、冬山特有の不安全因子としては、

(1) 雪が深く、寒気も厳しいので

- ① 足場が滑り易く、障害物も雪に隠れて発見しにくい。
- ② 着衣が厚くなり動作が鈍くなる。
- ③ 合羽の中は蒸れて汗をかくので寒気により体調を崩し易い。
- ④ 早朝は通勤路が凍結し交通事故の危険が大きくなる。

(2) 除伐・枝打といった刃物を使う作業ばかりで刃物による災害の可能性が大きくなる。

以上のようなものであるが、冬山の造林事業での名古屋管内のものでは、昭和50年度以後を見ると、

、 足場に起因するもの	(7件、 47 %)
手元狂い	(6件、 40 %)
異物の飛来、はねかえり	(2件、 13 %)

となっており、類似災害が多くなっている。我々は安全懇談会やTBM等でこのような災害の類型を話し合い、先の昭和49年度から重点的に取組んできたことや、冬山事業での経験も参考にしながら次のように不安全因子に対応してきた。

(1) 雪が深く寒気が厳しい。

① 足場が滑りやすい。

→足場の確保、確認の徹底、基本動作の厳守

② 着ぶくれ、合羽の中は蒸れる。

→その日の気象等に依じた着衣をこまめに調整する。濡れた着衣はみんなで協力して狭い小屋の中でも乾燥させる。

③ 通勤路の凍結

→タイヤチェーンの着用の励行。

(2) 刃物を使用する作業ばかりである。

→基本動作の厳守。出来るだけ鎌や少し太い除伐木には手鋸を使用する。

以上のようなことを署等の指導はもちろんであるが、私は毎日のTBMを重視し、その中で話し合い、毎日変わる気象や地形に対応し、みんなでそれを守ってきた。また、TBMの中では安全に関しての小さな工夫も出されている。それらには、○鉈、鎌の滑り止め（新勝式枝打鎌では突き上げの時に手が滑らないようにコブをつける。他）、○保護具（メガネ等）、○簡単に抜けるようになっている両刃の鉈のサヤからの抜け落ち防止、等色々なものがある。このようなことを検討しあい

ながら、より良いものにしてゆき、定着させてこられたのも、TBMの中の話し合いによってであった。

3. 今後に向けて

安全衛生活動の基本は気の長い、地道な繰り返しだといわれている。私の今回の発表は傍目には何の変哲も無いものであるが、この何の変哲も無いことをみんなで積み上げて来た成果が、今日までの無災害につながったと私は確信している。

最後に強調したいことは、この気の長い安全活動を支えてきたのは、造林班の皆のチームワークだということである。病気や災害のある職場には、明るい雰囲気は生まれ得ない。明るい雰囲気のある職場には、より良いチームワークが生まれ、それは安全にもつながる。みんながこのことを良く認識し、明るい職場作りと安全活動に取り組んできたのである。冬山のメンバーは毎年変わるし、山泊と通勤との混合形態となっているが、毎年親睦会を開き交流を深め、また言いたいことを言い合い、お互いの悪い所は注意しあい、そして、先に述べたように小さいながらも色々な工夫もしてきた。班の中での自分の役割を果たし、明るい職場作り、チームワーク作りに努めてきた皆の力があってこそ、無災害を目指した地道な努力が実を結んだのである。

今年度は、造林でも連携作業（1人だけ先に行ってしまうたり、1人だけ後においてしまうようなことはしない）が安全につながると考え、13人の造林班一同、よりよいチームワーク作りに取り組んでいる。最後に今年度の黒川担当区の冬山安全目標から1つを……。

「心あわせて

声かけあって

連携作業」